

# まちづくりビジョン策定委員会（第6回）会議録

■ 日 時：平成26年3月28日（金）午後2時30分～午後5時25分

■ 場 所：みなかみ町観光センター 2階 第2会議室

■ 出席者：

①まちづくりビジョン策定委員会（11／13名）

小林 洋、河合 生博、小野 章一、鈴木 和雄、津久井 功、持谷 美奈子、  
渡辺 一彦、金子 崇範、高橋 直也、本多 圭仁、鬼頭 春二

②アドバイザー（1／1名）

平松 庚三

③事務局（3／3名）

まちづくり交流課長 宮崎 育雄、商工振興GL 小池 俊弘、主査 大川 志向

■ 配布資料

資料1 まちづくりビジョンのイメージサンプル

資料2 ユネスコエコパークの審査基準と申請にかかる主な手続きの流れ

■ 会議内容

---

## 1 開会

## 2 議事

### （1）利根商業高等学校について

鈴木 （利根商業高等学校の現状について、教育委員会に出席した感想を交えて説明）

- ・ 自らが理事長であった時には、少子化が進むにつれて運営費である地方交付税が減少するため、県立化によって運営費を確保する考えであったが、県立化されれば学校の存続そのものが危ぶまれるため、現在は県立化反対の方針である。しかし、教育委員会としては県立化推進の方針を引き継いでいるようである。
- ・ 学校経営の方向性については、理事会と教育委員会が決定して学校側に指示を出すというのが本来の流れであると思うが、理事会・教育委員会ともに学校を運営するという認識が乏しく、学校側に全てを任せてしまっているように感じた。ビジョン策定委員会で方向性を検討して、理事会や教育委員会に提案できればよいのではないかと。

津久井 利根商の卒業生は企業にとって即戦力であったが、志願倍率の低下による競争の減少もあってか入社後の退職率が高まったため、企業は卒業生を採用しなくなった。出口の弱さに加えて、全県一区制となって、子供たちは都市部の高校に進学する傾向が強まっている。利根商は総務省管轄の学校であったり、学校組合立で、ある程度カリキュラムを自由に編成できたりと仕組みがおもしろいのでぜひ存続させたい。

平松 マーケティングとして捉えると、利根商という商品がなぜ売れないのか、会社を50年経営してきたのになぜ潰れそうなのかと考えられる。利根商を存続させたいとい

う地域の熱意は絶対に必要であるが、無くなるとは寂しいと情に訴えるだけでなく、まちづくりビジョンの柱である「人づくり」のためになぜ利根商が必要なのかを明確にして、戦略を練っていきたい。

鈴木 学校組合の予算の話をする、約4億6千万円の交付税が歳入として見込まれ、人件費として約3億円を支出している。1学級（40人）の生徒が減少したとすれば、歳入も約4千万円減少となる見込みである。

平松 3億円あれば1千万円の教員が30人も雇える。

鈴木 人事については、県の教育委員会の裁量であるが、来年度利根商に赴任する教員のほとんどが臨時職員であると聞いた。これでは魅力ある教育はできないのではないか。また、この委員会で利根商の改革が話題になっていることも伝えてあって、カリキュラムの変更も制度上可能とのことであった。

## (2) 利害関係者の招聘、中間報告会の開催について

- 委員会での活動を多くの人に広め、コンセンサスを得るためにも、利害関係者を委員会に招き、認識している現状や課題などについて1時間程度で聴取する。(課題をウエイト付して3つ以上発表30分、質疑応答30分)

### 【招聘する利害関係者】

- ・観光協会 小野副理事（宝川温泉 汪泉閣）
- ・水上温泉おかみの会 阿部会長（天空の湯 なかや旅館）
- ・みなかみ農村公園公社 阿部常務
- ・水上温泉旅館協同組合 阿部青年部長（蛍雪の宿 尚文） など

- また、町民や策定委員の推薦母体に所属する会員などを対象として、委員会でのこれまでの協議内容を報告したり意見を聴取したりする中間報告会を、5月下旬頃に開催する。ゲストスピーカーによる講話も同時開催とする。

### 【中間報告会候補日】

5月27日（火）、28日（水）、29日（木） 午後2～4時、カルチャーセンター

### 【ゲストスピーカーの候補】

- ・高橋 美江（絵地図師・散歩屋）
- ・張 凌蘭（シャンハイ・スマートビジネス コンサルティング 取締役社長）
- ・澤浦 彰治（野菜くらぶ 代表取締役）
- ・木内 博一（農事組合法人 和郷園） など

## (3) まちづくりビジョンの全体像について

平松 10年後のビジョンを描くことが我々の目的であって、前回はユネスコエコパークの町として中長期計画を策定することとした。理想のみなかみ町を議論することは比較的簡単であるが、ビジョンを絵に描いた餅としないためにも、3年や5年の中短期の計画（プロセス）が必要で、KPIによって進捗を管理する必要がある。

また、ユネスコエコパークに認証されただけで入込客数が増えるわけではないので、例えば、町内のエネルギーは全て自然エネルギーとしたり、学校でのエコ教育を充実させたり、世界のエコパークの発信基地としてサミットを開催したりして日本一のエ

この町とするなど、今後10年間でお客が来たくくなるようなまちづくりをしなければならない。

事務局（ユネスコエコパークの審査基準とスケジュールについて、資料により説明）

- ・ユネスコエコパーク候補地の機能を有していることのほかに、地域全体の保安全管理や運営、研究や教育、地域振興や自然環境と調和した発展に関する計画等を有していることが、ユネスコエコパークの審査基準となっていること。
- ・申請や審議等のスケジュールを鑑みると、ユネスコエコパーク認定は最速で2016年となること。

平松 町全体を日本一のエコの町としていきたいが、どのような手法があるか、ぜひみなさんの意見をお伺いしたい。農業の分野では、有機農業を実現するのは無理でも、安心安全なみなかみの特産品として牛糞や鶏糞を肥料に活用することなども考えられる。教育の分野では、自然教室として全国から小中学生を誘致し、町内の児童・生徒にガイドさせるなどの手法も考えられる。

小池 既にユネスコスクールという制度があって、ユネスコの理念を実現するための平和や国際的な連携を実践する学校として、全国で約600校の幼稚園、小中学校、高等学校が加盟している。ユネスコエコパークは持続可能な開発のための教育の学習の場として位置づけられており、ユネスコスクールと連携させることで相乗効果が期待できる。

平松 登録することでどのようなメリットがあるのか。あまり聞いたことがない。

小林 活用の仕方が分からないから、登録までして終わっているのではないか。

平松 ユネスコスクールの本部をみなかみ町に誘致することなども考えられる。また、沖縄科学技術大学院大学のように、エコロジーを研修する学者がみなかみ町に集まるような仕掛けも面白い。みなかみがエコロジーの日本の拠点であり、世界の拠点であって、ダボス会議のようなものが開催できれば。夢は大きいほうが良い。

- 沖縄科学技術大学院大学のホームページにより、役員や施設概要を確認する。
- ・平成25年10月から本学理事に尾身幸次氏が就任。内閣府特命担当大臣（沖縄・北方対策、科学技術政策担当）時代に、国際的な大学院大学を設置する構想を提唱

平松 この地域でこのような施設と生物の共存、赤谷プロジェクト、エコツーリズムなどをどのように絡められるか。

小池 ユネスコエコパークの緩衝地域としては、赤谷プロジェクトやエコツーリズムなどの活動がすでになされているので、どちらかと言えば移行地域での活動としてこのような取り組みを計画していけばよいのではないか。

平松 みなかみ町の消費単価が低く、草津温泉と大きな差があることから、エコツーリズムが外貨の獲得につながっていないのではないか。温泉とおもてなしやおいしいものは当然として、エコを付加価値として消費単価の増加にもつなげていきたい。子供や学生に対しては日本一のエコの町でよいが、最終的な目的は観光振興につなげるこ

と。そのための仕掛けをつくる。いたずら書きでよいので、このポンチ絵（資料）に何を加えられるかを検討したい。

「人づくり」として、小中学校で年間数時間の授業を組むこともできるし、利根商に観光やエコロジーの学科やカリキュラムを組むことで、域外から生徒を呼び寄せることもできると思う。地域の子どもが減るのは明白で、それでは他校と取り合いになってしまうから、マーケットを広げるという手段もある。エコロジーとか観光のカリキュラムをインターン制度も絡めて実施し、夏休み期間などは観光業の実習などを行うことも考えられる。無責任でよいので、どんどん意見を出していただきたい。

平松 エコと農業の接点はどこにあるのか。肥料に牛糞や鶏糞しか使わないということも考えられる。温泉の排水には熱が残っているの、ハウス栽培などに活用できないか。

小林 温泉の成分にもよると思うが、設備投資の方が膨大になってしまうのではないか。

平松 湯宿温泉に行くたびにもったいないと思う。60度の温泉をただ流してしまうのではなくて、床暖房などに活用すればよい。

鈴木 温泉の活用は考えた方がよい。湯桧曾にも使っていない源泉があって、上越線のトンネルから湧出した温泉が湯桧曾駅まで来ている。これをそのまま活用するには経済合理性がないが、トンネルの側を200メートルも掘れば温泉が出てくる。融雪などにも活用できる。

平松 エコパークの時にはときどきは経済合理性を無視してでもやらなければならない。でも今考えるのはエコだから、今垂れ流しとなっている温泉を活用できないか。

鈴木 温泉水でスッポンやふぐを養殖するなどの事例はある。それを観光旅館で提供する。

小池 運搬に係るエネルギーを考えると、野菜でも魚でも地産地消が一番のエコである。

平松 漁業も温泉を活用してできるような気がする。

渡辺 新潟県では雪をためておいてクーラー代わりに使ったり、ワイナリー（雪室）としても活用したりしている。

平松 エコと林業は結びつかないか。例えば、みなかみエコパークパビリオンを木製で造るのはどうか。法隆寺に次ぐ木造建築がみなかみ町に造られたというのも面白い。木造の3～4階建ては世界的にもないのではないか。

宮崎 集成材を使って10階建ての建物を作ることができるし、コンクリートの柱の代わりに使うことが研究されている。旅館や公共施設をすべて木造で建築するのはどうか。

鈴木 木造の大きな体育館が熊本県の小国町で建設されている。小国町では小国杉の産地で林業が盛んである。

- 熊本県小国町にある小国ドームをホームページ等により確認。
  - ・小国ドームは、5, 602本の小国杉を使用した木造立体トラスト構法で建築された

木造の体育館。屋根はステンレス張りになっており、昭和63年にオープン。

平松 安全とエコは結び付けられないか。

持谷 震災の時には多くの被災者を受け入れて、ノウハウが蓄積されているので、お金にはならないかもしれないが、町と安全安心というイメージは結び付けられる。

平松 オリーブブランドとエコは結びつけられないか。

鈴木 オリーブはみなかみで作れるのか。ある程度の気温がなければできないのではないか。

宮崎 専門家に現地を調査していただいているし、新潟市でも栽培されている。

河合 どんなものでも造ることはできるが、ビジネスとして成り立つのか、やろうとしているのか。個人で少しずつやっても話にならない。

平松 それよりは町が一括してやった方がよい。ビジネスモデルをつくる必要はあるが、現在の日本の健康志向からすれば、需要が下がることはないのではないか。

本多 イタリアに視察に行ったが、あれほど大規模にできれば採算がとれると思う。オリーブオイルの搾取施設も個人では採算が合わない。また、オリーブの施設を造るよりは、既存のリンゴの加工施設（ジュース、ドライフルーツなど）などを整備する方が現実的である。

平松 きっかけが必要で、オリーブの施設にリンゴやサクランボの施設も便乗して整備し、そこにエコを絡めればよい。

高橋 農協には加工施設があるが、ジュースしかできない。

持谷 地元の農産物の加工品があれば、ぜひ旅館でも活用したい。リンゴを乾燥したアップルティーやコンポートなど。

小池 減農薬でやることは、二酸化炭素の排出削減につながり、それだけでもエコになる。

高橋 県では、有機肥料や減農薬・除草剤などに取り組む農家をエコファーマーとして認定する制度を設けている。農薬の代わりに虫を集めるトラップなどがあるが、コストが割高になるので実践できていない。補助金などを活用できるのであれば、使う人も増えて、町としてアピールできるのではないか。

小池 農業で差別化するには、加工の面と低農薬による安全安心であるが、条件がそろわないために実現できないでいる。この機会をチャンスにしてもらえればよい。

平松 ブランド化されれば、米の南魚沼、蟹の三国のようにインプットされる。みなかみ＝安全安心とインプットできるような仕組みをエコパークと絡めてできるとよい。

平松 できるかできないは抜きにして、日頃現場で感じている意見がほしい。これを利用して自分たちのビジネスに活用しようとしていただいて、中間報告会までに大きな絵に描いた餅を作りたい。特に温泉を利用したトロピカルフルーツ生産など、いろいろな意見をいただきたい。

### 3 次回委員会の開催について

- 次回の委員会について、次のとおり日時と場所が決まる。

日時：4月10日（木） 午後2時30分から

場所：観光センター 2階 第2会議室

### 4 閉会